批評と紹介

リッチ史料について

矢澤利彦

「リッチ史料」(Fonti Ricciane) とは現在イタリアのグレゴリオ教皇大學及びローマ學藝大學の教授であり、われわれには商務印書館印行の百科小叢書の一つである名著「中國天主教傳教史」の著者として、また日本版「カトリック大辭典」の中國の部の擔當執筆者としてよく知られているデリア師 (Pasquale M. D'Elia 漢名德禮賢) の編集および加註のもとに現在刊行途中にあるマッテオ・リッチ (Matteo Ricci) ならびに同時代の中國キリスト教に關する史料のことである。既に公刊されたもの、および將來公刊の對象となるものは、㈠ リッチ自身の手になる長文の「キリスト教中國來傳史」(Storia dell' Introduzione del Cristianesimo in Cina)、㈡ リッチのヨーロッパ宛書簡四十八通、㈢ ルッヂエリ (Ruggieri 羅明堅)、ヴァリニャノ (Varignano 范禮安)、サンチェス (Sanchez)、デ・サンデ (De Sande 孟三德)、ロンゴバルディ (Longobardi 龍華民)、ディアス (Diaz 李瑪諾) 等を主とする來華宣教師のヨーロッパ向け書簡百二十七通、㈣ 一五八九年から一六〇七年までの中國イエズス會年報、㈤ ルッヂエリの紹興旅行記・サンチェスの中國記等を含む雜史料數種である。これらの中には既刊のものもあるけれども、全然未刊のものもすくなくはない。この出版が完成された場合全部で何卷になるかはきまつていないようである。第二次大戰中である一九四二年に第一卷が公刊されたのち、しばらくあとが續かなかつたが、戰後の一九四九年に至つて第二・第三卷が續けて公けにされた。東洋文庫に入庫しているのはこの三冊だけで、その後第四卷以下が續刊されたかどうかは知らない。ただ第三卷に挿入されてある小紙片によれば、第四卷以下もこれまでのものと同形式の裝本をもつて刊行される予定であるとのことであるから、あるいは既に世に出ているのかも知れない。既刊の三冊の中、第一・第二の兩卷はリッチの主著である前記「キリスト教中國來傳史」にあてられ、第三卷はその補遺および索引となつている。すなわち詳しくは次の通りである。

第一卷。「來傳史」の第一篇から第三篇までを含む。マカオから南昌へ。一五八二年から一五九七年まで。

pp. CLXXXVII+387. Roma. La Libreria dello Stato.

第二卷。「來傳史」の第四篇から第五篇までを含む。南昌から北京へ。一五九六年から一六一〇年まで。pp. XXXV+652.

第三卷。(イ) 万曆三十八年、リッチ歿後パントーハ(Pantoja 龐迪我)とウルシス(Ursis 熊三拔)とが墓地の下賜を神宗に願い出た奏疏および神宗の旨、王應麟の手になるリッチ碑文の原文と譯註。(ロ) リッチ年譜。(ハ) タッキ・ヴェントゥリ版テクストとデリア版テクストとの相違表。(ニ) 索引。(ホ) 中國語索引。(ヘ) 正誤表。

なお第一卷の卷頭には本書を國家出版(Edizione Nazionale)とするというヴィットリオ・エマヌエレ三世の一九四一年七月十一日付布告が掲げられ、また當時の王立學士院長ルイヂ・フェデルツォニ(Luigi Federzoni)の序文が載つている。

周知のようにリッチ文書の刊行は今回がはじめてではなくて、既に彼の昇天三百年忌の紀念事業として一九一一年から一九一三年にかけてタッキ・ヴェントゥリ(Tacchi Venturi)師により、Opere Storiche del P. Matteo Ricci と題し、右の「キリスト教中國來傳史」に當る I Commentari dalla Cina が第一卷(Macerata, 1911. pp. LXVIII+650)、リッチおよび彼の同僚のヨーロッパ向け書簡集が第二卷(Macerata, 1913. pp. LXXII+570)として公けにされている。これに對し、デリア師の新著はリッチの書簡や彼の同僚の書簡・手記は勿論、當時の年報の類をも一層網羅的に納め、これにタッキ・ヴェントゥリ師の場合には全くなされなかつた漢文史料をも參考にして詳細な脚註を加え、文中の諸事件について、他の史料にこれと同一の事件を扱つたものがある場合には一々これを照合し、さらに官職名・地名・人名等に對してはすべて漢字による原名を考定註記している。さきにタッキ・ヴェントゥリ師の編著によつて教會關係の祕庫に藏された尨大な量に上る原史料を利用できる幸福に浴していたわれわれは、今次のデリア師の新著によつて正にかゆいところまで手の屆いた註をも與えられ、受益するところは極めて大きい。このことは十八世紀までのヨーロッパ人による中國紀行や書簡などを讀んで見たことのある人にはよく判ることであろう。すなわち中國の官廳名や官職名はこれらの記錄には非常に思いきつた意譯をもつて記されてあるのが普通であり、人名や地名に至つては、各自獨得のローマ字轉寫法によつており、特に人名の場合はそれが姓名なのか、名だけなのか、號なのか不明のことが多い。その上印刷された際には個有名

詞に限つて殊更に誤植が多く、版を異にする度毎にあやまりがふえて行く。翻譯版の場合などはこの現象は一層著しく、翻譯版による場合にはすくなくとも個有名詞だけは原刊本によらなくてはならない程である。こういう點でデリア師が個有名詞に漢字原名を入れて呉れたのは大きな業績であり、研究者にどれ程役に立つか判らない。新編著の最大の特色がここにあることは明らかである。しかし個有名詞に對するリッチの音寫法が甚だ不統一であり、獨特であるだけにこの仕事はなかなか困難なことであつて、研究者の異論の出て來る余地もありそうである。

マッテオ・リッチの名前は日本人の手になる中國史・東洋史の概説書には必ず載つており、日本の東洋史教育においてはマルコ・ポーロとならぶ著名なヨーロッパ人であることは確かである。一方學界においても中山博士の「利瑪竇傳」をはじめとしてかなり多くの研究が公けにされている。ところが一九一一（明治四四）年―一九一三（大正二）年に發行され、モリソン文庫目錄にも見えている前記タッキ・ヴェントゥリ師編 Opere Storiche がこれらの日本人の研究にほとんど反映していないのは不思議である。その主な理由は右の史料がイタリア語・ラテン語・ポルトガル語というようなわれわれには余りなじみでない言葉で書かれてあることによるのであろう。しかしいやしくもマッテオ・リッチについて論ずる限り、必ずこのリッチ史料によらなくてはならないことは疑う余地がない。わたしは明代キリスト教史の專攻者ではないけれども、日本のリッチ研究が一層の飛躍をとげることを期待するので、ここにデリア師の新著を紹介し、日本のリッチ研究者が今後この第一等史料を驅使するようになる端緒を作りたい。リッチの研究はマルコ・ポーロの研究に比して決して劣らない價値のあるものである。中國近世カトリック傳道の開祖として彼の苦難に滿ちた業績、西洋科學及び西洋技術の紹介者としての彼の役割、中國思想に對する彼の意見、中國の社會・經濟に對する彼の觀察、中國社會が彼をどういう風にうけ入れたか等の諸問題は當然とりあげられなくてはならないと考える。この中には日本人にとつて研究に不利な題目もあるけれども、また反對に有利なものもある。それはともかく、新刊の「リッチ史料」は編者デリア師の言うように教會史および支那學の研究者ばかりでなく、極東と極西、中國とイタリアとの最初の接觸を知ろうと望む者にとつても大いに興味のある書物であることは疑いない。

「キリスト教中國來傳史」は右に述べたように五篇からなつている。いまデリア師に從つて各章の內容を簡單に紹介しよう。

第一篇はデリア師が「序説・中國と中國人」と題したもので、以下諸篇の序論にあたつている。この篇においてリッチは中國の國土・物産・美術・工業・言語・文字・政治・禮節・悪習および宗教について簡單に述べている。

第二篇は肇慶府に定められた最初の教屋の設立についての物語りで、他の人々によつて行われたこれまでの中國傳道への努力について回顧の一べつを行つたのち、一五八三年九月十日から一五八九年八月中旬、すなわちどこか他の場所に教屋を造つてもよいという許しの下にではあるが、とにかく肇慶府の教屋から逐出されるまでの間に起つたことが述べられてある。すなわちここでは最初の教屋・最初の教堂の設立および擴張について語られ、また中國人の最初の受洗者と最初のキリスト教徒、民衆および當局者との最初の接觸、彼が行つた科學上の最初の仕事、最初の成功と最初の困難、リッチの同僚であるルッヂエリとダルメイダとによつてなされた浙江及び湖廣への最初の長旅、最初の災難、および肇慶から韶州へのいやいやながらにやつたことではあるが、天佑に惠まれた移動について記している。

第三篇は韶州・南昌兩教屋の物語りである。それぞれ一五八九年八月二十六日から一五九五年四月十八日までと、一五九五年六月二十八日から一五九八年六月二十五日までの期間を含んでいる。ここではまず肇慶から韶州までのリッチの旅行、千名を下らない佛僧が住んでいた有名な南華の寺院訪問、韶州到着、最初の中國イエズス會士二名の入會。彼の最初の數學の弟子との出會い。彼の最初の同志二人の死、韶州市内および郊外における最初の傳道上の成果が述べられている。ついで梅嶺を越え、いくつかの河や潘陽湖および揚子江を經由した韶州から南京までのリッチの最初の大旅行、南昌への逆戻り、學者や皇族達の歡迎、リッチがいたるところにおいて博した賞讃、この江西省の首都における教屋建設について記されている。

第四篇は北京・南京兩都に設立された教堂の物語りであり、前半は一五九九年二月六日から一六〇〇年五月まで、後半は一六〇一年一月二十四日から一六〇二年九月二十一日までの期間を扱つている。前半では南京と大運河とを經由した南昌から北京までの最初の北上、一五九九年九月の北京到着、今日の江蘇省地方への逆戻り、南京到着、新教屋の設立、多數の顯官達が彼の講義を聞きたがつたこと。南京の貴族や知識階級への彼のすばらしい影響力等が語られている。後半では南京から北京宮廷までの彼の最後の大旅行、大監馬堂との出會い、北京に來るようにとの皇帝の招命、宮城およびその他の場所で行われた歡迎、初期の諸困難の克服、北京において

獲得した最初の友人達について語られている。

第五篇では北京教屋の發展と中國全傳道の組織化が扱われている。時期は一六〇二年の終りから一六〇九年の末に亘つている。ここで述べられているのは中國の士大夫層からの最初の改宗者達、ユダヤ人とキリスト教徒の子孫との發見、カタイオとチナとが同一のものであることを立證しようとして陸路インドから甘肅省に赴いたイエズス會士ゴエス（Goes 鄂本篤）の大旅行、リッチによる宗教書及び科學書の著述と出版等であり、最後に一六〇九年までの韶州・南昌・南京各教會の教情について概觀が行われている。

右「來傳史」の稿本は現在ローマの「イエズス會ローマ文書館」(Archivio Romano della Compagnia di Gesù) に所藏され（日本—中國部一〇六a）、保存狀況も極めて良好であるという。この記錄の大部分がリッチ自身の手になるものであることは、稿本の第一葉につけられたニコラ・トリゴール (Nicolas Trigault 金尼閣) の次の證言（ラテン文）がこれを示している。

中國イエズス會傳道の代理人で、イエズス會士である余ニコラウス・トリガウティウスは證言する。イエズス會の來入とキリスト教について記したこの回想錄が良い記憶の持主であつたマッタエウス・リキウス自身の手によつて記されたものであること、および同師の昇天までの中國傳道の歷史をこの記錄ならびに他の記錄から編著する目的で、余自身が中國からローマに持ち歸つたものであることを。余は右の著述を既に書き上げた。神に稱讃を。しかし余が證言するのはただイタリア語で書かれた部分だけについてである。なぜならばポルトガル語およびラテン語をもつてつけ加えられた他の部分は善き師（リッチ）が着手したけれども未完のままに殘して逝いた著作を完成するために、信賴するに足る年報の原本にもとずいて、余自身が拔粹・選擇したものであるからである。右の事實に對し、余自らの手をもつてこの紙片に記し、封をした。一六一五年二月二十六日。ローマにおいて。ニコラウス・トリガウティウス。

リッチがこの著述に着手したのはデリア師の考證によれば一六〇七年以後のことで、一六一〇年五月十一日の彼の死の直前までずつと仕事を續けていたといわれる。しかしトリゴールも言つているように遂に完成するまでには至らなかつた。そしてリッチについで中國イエズス會長となつたロンゴバルディから派遣されて、一六一三年應援宣教師徵募のためにマカオ發ローマに向つたトリゴールはこの原稿をヨーロッパに持ち歸り、それに前揭「證言」に見えるような追加を行

つたのち、イエズス會文書館に納めたようである。トリゴールのローマ到着は一六一四年十一・二月の交であつたが、すくなくとも翌年の二月までには右リッチ稿本のラテン語譯を完成していたらしい。そのラテン語譯がこの年の秋に公刊された有名な「マッテオ・リッチ師の回想錄にもとずくイエズス會によるキリスト教中國遠征記」De Christiana Expeditione apud Sinas ab Societate Iesu Suscepta, ex P. Matthaei Ricij Commentariis に外ならない。この書が一たび公刊されると非常な反響を呼び、一六一六年、一六一七年、一六二三年、一六八四年と相續いてラテン語版が世に出た外、一六一七年にドイツ語譯、一六二一年にイスパニア語譯、一六二二年にイタリア語譯、一六一六年にフランス語譯がそれぞれ出版された程であつた。そしてリッチの原稿は二十世紀に至るまで公刊されることがなかつたため、約三百年間に亘つてこのトリゴールの著書が、明末におけるイエズス會傳道の眞相を語る史料として學界で珍重されて來たのである。ただその間一六六三年初版・一八二五年再版が發行されたバルトリ(Daniello Bartoli) 師の中國イエズス會史(Dell' Istoria della Compagnia di Gesù, La Cina) はリッチ稿本を直接參考し、明代の部分を記述するに當つては主としてこの稿本に據つた點で、獨特な意義が認められるのである。それというのもトリゴールのラテン語譯は當時の飜譯の多くがそうであるように、極めて自由な譯であつて、必ずしもリッチ稿本の姿をありのままに傳えておらず、殊にローマ字に轉寫された中國の人名や地名で稿本とはかけ離れてしまつたものがあるため、原名を考定する場合にしばしば困難を感ずることがあつたからである。だからトリゴールの「遠征記」は實際に中國にも滯在し、中國傳道の實情を見聞した人の著述として、それ自體一つの史料としての高い價値をもつことは疑いないのであるが、イエズス會初期中國傳道を物語る第一等史料ということはできなかつたのである。この缺陷を或る程度までバルトリの「イエズス會史」が滿して呉れていたのであるが、これも編纂物であつて、リッチ稿本の全貌を示すものではなかつた。こういう點に先にはタッキ・ヴェントゥリ師、この度はデリア師によるリッチ稿本印行の最大の意義があるのである。

タッキ・ヴェントゥリ師はこのリッチ稿本について「中國回想錄」(I Commentari dalla Cina) という名をつけた。この名稱はイゥリウス・カエサルの「ガッリア戰記」(Commentarii de Bello Gallico) を想ひ出させる名稱であるが、同師がこのような題名をつけたのは、ひとえに前掲のトリゴールの證言及び「遠征記」にリッチ稿本を「回想錄」(Com-

mentarii) と呼んでいることから來ているのであつて、リッチ自身はその手記の中で、彼が著述中の書について「イエズス會及びキリスト教の中國來入記」(Della Entrata della Compagnia di Giesù e Christianità nella Cina) あるいは「イエズス會によるキリスト教の中國來傳記」(Dell' Introduzione del Cristianesimo in Cina per mezzo della Compagnia di Gesù) などと呼んでいる。またロンゴバルディはその書簡の中でリッチの著述のことを歴史 (Storia) といつている。こういうところからデリア師はこの書を「キリスト教中國來傳史」(Storia dell'Introduzione del Cristianesimo in Cina) と名ずけたということである。

なおトリゴールの言うところによれば、「來傳史」はリッチの死んだ時にまだ完成していなかつたもので、その後トリゴール自身の補筆によつて今日の姿に整えられたものであり、リッチの手になる部分はイタリア語、トリゴールが補充した部分はラテン語およびポルトガル語で書かれてあるということである。實際に當つて見るとラテン語の部分というのは第五篇の二十一章および二十二章で、デリア師が他の史料を檢討した結果によると、この中二十一章の方は一六一〇年のイエズス會中國年報の、二十二章の方は一六一一年の年報のそれぞれ抜粋にすぎないものである。またポルトガル語で書かれてあるのは第四篇十七章の三分の二と十八章全體、第五篇の十八章・十九章・二十章である。これらはすべて韶州教會の宣教師が北京のリッチに送つた教情報告の抜粋であつて、第四篇十七・十八章、第五篇二十章はロンゴバルディ、第五篇十八章はヴァニョーニ (Vagnoni 王豊肅)、同じく第五篇十九章はカッタネオ (Cattaneo 郭居靜) の報告をそれぞれもとにしたものだそうである。年報はラテン語で書かれるのが普通であるから、イタリア語の得意でないトリゴールがこれをイタリア語に飜譯してリッチの本文と統一を圖るというようなことをしないで、そのままを抜粋して入れたことは判る。しかしイタリア人であるロンゴバルディ、ヴァニョーニ、カッタネオ達の報告の抜粋がポルトガル語であることは考證を要する。これについてデリア師は二つの説をたてている。一つはトリゴールの利用したのはリッチがもつていたロンゴバルディ等三宣教師の報告のポルトガル語譯であつたろうという説であり、も一つは右三宣教師はイタリア人ではあるが、彼等の來華はポルトガル王の傳道保護權の支持の下に行われたものであり、資金その他の面で接衝する相手は大部分ポルトガル人であり、同志の多くもポルトガル人であつた關係で、彼等が中國でお互同志の間で使用したのはイタリア語でなくポルトガル語であり、從つてリッチ宛の報告もも

ともとポルトガル語で書かれてあつたのであろうという説である。當時の宣教師の超國籍性と、次に述べるようにリッチ自身が母國語を忘れかかつていたという傳えからして、あとの説の方が當つているのではないかと思う。そしてこのラテン語およびポルトガル語の部分は、タッキ・ヴェントゥリ版の場合はそのままになつているが、デリア版においてはイタリア語に對譯されているので、使用者には大いに便利である。いずれにしてもトリゴールがこの部分をイタリア語に譯したりしないで、自己の挿入の責任を明かにしておいて呉れたのは有難い。

さてリッチは三十年間に亘る東洋傳道の間に、例えばルッヂエリ、カッタネオ、ウルシスというようなイタリア人と生活を共にしたこともあるが、一方ダルメイダ、デ・サンデ、ソエリオ(Soerio 蘇如望)、フェレイラ(Ferreira 費奇觀)、ディアス(Diaz 李瑪諾)等のポルトガル人、パントーハのようなイスパニア人と一緒に暮した期間も永かつた。リッチはこれらの宣教師との會話に際して主としてポルトガル話を用い、またイスパニア話を使うこともあつたが、母國語は余り使用しなかつたようだ。他方また專心中國語の習得に努め、中國人との會話には一切これを使用したから、結局その晩年には母國語であるイタリア語よりも、ポルトガル語や中國語の方が遙かに達者になつていたといわれている。このことを彼はしばしば書簡の中に書いており、一六〇五年の友人宛書信に「イタリア語を思い出そうとして、貴方の書簡を讀み返しました」とあるのはその一例である。ましてすぐれたイタリア語辭書や文法書を手許に持つていなかつたのであるから、彼のイタリア語は文法も綴りもかなり異常なものとなつている。單語の綴りにはラテン語式・ポルトガル語式・イスパニア語式のものが混入しており、現代イタリア語の知識しかもたないものは全く困惑する。lをr、dをt、uをoとしたものなどは枚擧にいとまがない。これらの異常な綴りについてはタッキ・ヴェントゥリ師も脚註において訂正しているが、デリア師は更に徹底してこれを行つている。しかし文法についての註釋がないので、われわれのように現代イタリア語の乏しい知識しかない者にとつては難解な點が多い。リッチ史料讀解のための文法を簡單なものでもよいからつけて貰えると助かつたと思う。このようにリッチのイタリア語に對する知識が大分あやしくなつていたのにも拘わらず、彼がこの稿本をラテン語やポルトガル語ではなくて、敢えてイタリア語で書いたという點は大いに注目しなくてはならない。デリア師の著書が「國家出版」とされた理由の一つ、およびリッチがイタリアにおいて今日なお多大の敬意を表せられて

いる動機の一つはこの點にもあるのではあるまいか。

最後にデリア師の新著には第一卷十八枚、第二卷二十五枚、第三卷二枚というように多數の貴重な圖版が掲げられており、これだけでも充分價値のあるものである。卷頭にのつているリッチの肖像圖はマカオ生れの畫家であると共にイエズス會の傳道師でもあつた游文輝（エマヌエレ・ペレイラ Emanuele Pereira）がリッチ昇天の直後に描いたもので、一六一四年にトリゴールが先きの稿本と共にローマに持ち歸り、それ以後ずつとイエズス會館に保存されていたものの複製である。

この紹介は文部省科學研究費による調査の一部である。

附　記

最近わたしも Fonti Riciane をローマから購入したがこれも三冊だけであるから、すくなくとも一九五三年末までには四卷以下は出ていない譯である。なおデリア師には別に一六〇二年のいわゆる李之藻版世界圖に對する研究である Il Mappamondo Cinese del P. Mattes Ricci, 1938. という大著があるが、これは殘念ながら見る機會がまだない。しかし新著の註の中で世界圖については詳論しているから、同氏の意見はよく分る。それによればこれまでの諸學者の見解をくつがえすような新發見はなかつたようで、ただより綿密になつたという程度ではないかと思う。遺憾に思うのは日本の鮎澤氏の業績を充分に參照していないことで、これが行われておれば師の註はもつと完全なものになつたろう。同時に鮎澤氏の最近の研究もデリア師の著作を見、リッチの原文に當つていたならばもつと光彩を發揮したものとなつていたことであろう。こういう問題は國際的な協同研究が必要なのではないかと痛感する。デリア師のリッチ世界圖についての意見は別に機會を得て紹介したい。

（埼玉大學文理學部助教授）